

思い出

七期生 今野 純子

文を書くという私にとっての大仕事をお引き受けした時から毎日悩みの種でしたが、覚悟をきめることにいたします。当時の思い出は山程もありますので、あれもこれもと思うのですが、いざ書くとなると何からどの様に手をつけて良いやら全く見当もつかず混乱状態です。何しろ古い話ですのでわかりにくいところがあつたりして読みにくいかと思ひますが、その点はお許し願うことにいたします。

昭和二十七年、入学当初から皇居前の乱闘メーデーの事件に出会い、西高全体がとても大変な年でした。卓球部では荻村先輩をはじめ諸先輩方の御指導がきびしく、つらいこともありましたが、とても活気がありました。素振り、かべ打ち、フットワークなど、正直あまりおもしろいことではなし、二学期頃には退部者が出はじめましたが、斉藤先輩が全日本ジュニアの東京代表に決定した時は本当にうれしく思いました。丁度その頃、先輩に習ってラケットを十ミリのスポンジに変更しましたが、憤れるまでには長期間を必要としました。どうやら打てる様になつた時には学業の方が最低線をさ

まようこととなり、両親の反対を押し切り、苦しみながらつとのことで一年を終了することが出来ました。

春休み練習の、ある日、いつものメンバーの他に新顔が二人参加して居りました。八期生の遠藤、村田両氏です。卓球部三十年間数多くの部員の中で、入学式以前に入部した人は彼等の他に聞いて居りません。女子部員の不足もあり、その後彼は彼等後輩男子との練習が多くなりました。

二年生の時、荻村先輩がロンドンの世界大会で優勝され「音なし短時間の決戦」というスポンジラケット同志の決勝戦のニュースが印象強く残っています。現在の日大講堂でアジア大会が開かれたり、荻村先輩の活躍される場が多くなるにつれ、我々を御指導下さる時間が少なくなった点は、喜ばしい反面さびしいことでもありました。後に続くものは誰かと皆で頑張っていました。後、現実は厳しいもので仲々思う様にはならず本当に残念でした。

しかし、二十余年後の現在でも細々とはありますが、白球を追いかけ汗を流す喜びを感じることが出来るのも、当時諸先輩方から指導頂いたおかげと思ひ、大いに感謝して居ります。後輩諸氏の中から一日も早く第二の荻村選手の出現することを望んで止みません。

無断でお名前を書かせて頂いた荻村、斉藤両先輩及び遠藤、村田の両氏は西高卓球部の思い出を語るには欠くことの出来ない方々ですので、お許し頂くことをお願いいたします。